

第1部 エッセイ

テーマ「おばあちゃんの手料理とごはん」

一般の部

木島平村長賞

今は辛口バナナカレー

森本 慶一

小学三年生の夏休みだった。

その日、私は母親にこっぴどく叱られ、家を飛び出した。夕焼け空の下、涙に目を腫らしながら、家から遠く遠くへと駆けて行き、いつもの避難場所にたどり着いた。

「：外、暗かったやろ」

それ以上何も言わず、カズエはんは私を迎え入れてくれる。充血した私の瞳を見て、家で何があったのか察したようだった。

「おばあちゃん家で、夕飯食べていきや」

そう言っただけで、台所に立ったカズエはんは、野菜と

鶏肉を手際よく切り、鍋の中で炒め始める。しばらくして、ぐつぐつと具材の踊る音が聞こえたかと思うと、たちどころにスパイスの良い香りが漂ってきた。

「お待ちどうさん。ゆっくり食べ」

目の前に出されたのは、カズエはん特製のバナナカレー。いじけた私がやって来た時に、必ず作ってくれる特別メニューだった。隠し味のバナナの甘さが、辛みをまろやかにしてくれる。意固地になった私の心を和らげるのに、十分な優しさが詰まっている。

幼稚園の頃まで甘口だったカレーが、いつの間にか中辛カレーに変わっていた。気が付かぬ間に段々と大人になる自分を、上手く扱えない年頃の私にとって、バナナ入り中辛カレーはまさに、『自分』カレーでもあった。

辛くて、ほんのり甘い。引っこめたはずの涙をこぼしながら、一口また一口と食べ進める。食べ終えた頃には、逆立った感情も落ち着いて、穏やかな気分になっていた。

「泊ってくか？」

カズエはんの質問に、首を横に振った。もう大

丈夫と、来た時と同じ赤い目をしながら答える  
と、カズエはんは微笑んで言った。

「氣いつけや」

優しい言葉と優しいカレーが、帰り道に行く後  
押しをしてくれる。温かくなつた胸に手を当てて  
歩いていくと、夜空に夏の大三角が輝いて見え  
た。